かみのやま歴史・文化財さんぽ

第３号（平成２９年１１月）

羽州街道

ならげしゅく　かなやまごえ

楢下宿・金山越

その１（金山峠）

文じい「さあ、ここから登るぞ。」
あゆむ「道路というけど、山道だね。」
ミドリ「家だわ。住んでいるのかしら」
文じい「今はだれも住んではおらん。」

文じい「むかしは多い時で 20軒もあったそうじゃがのう。」
あゆむ「あれ、人がいるよ！」
文じい「おお、松田さんだ。松田さんだけがこうして畑仕事にきておる。」
みんな「こんにちは。」
ふみお「建物はないけど、石がつんであるところは家があったのでしょうね。」
文じい「そうじゃな。ここは作兵衛さんという家で、むかし、山形の秋元というお殿様が館林というところに移ることになり、その時、家来の山田という人の奥様で「音羽」という人の一行が立ち寄ったお宅のようなんじゃ。」
あゆむ「そんなのどうしてわかるの？」
文じい「音羽さんが“お国替絵巻”として絵日記のように記録したものが残っておるのじゃ。」

あゆむ「有名な道だったのかな。」
ふみお「“羽州街道”と言うんだよね。」
文じい「そう、むかし江戸時代というころに、江戸、今の東京じゃな、そこから北に上って、福島県の桑折というところからこの道に分かれて七ヶ宿や上山を通って青森の油川までの道じゃ。山形や秋田、青森の 13 の殿様が通った街道じゃ」
ミドリ「むかしの国道というわけね！」
ふみお「道路は変わってきたんだね。」
文じい「それといっしょに、“まち”もな・・・」
ミドリ「“参勤交代”って聞いたことがあるわ。」
ふみお「殿様が、1 年おきに江戸に行くことだね。」
文じい「そう、行列を組んで行くから大変なことだったようじゃな。」
あゆむ「あ、おじぞうさんだ。」
ふみお「向かいにも何かの碑がたっている。“八日講供養塔”と“湯殿山”かな？」
ミドリ「お参りをしたんでしょうね。」

文じい　「よく読めたな。ところで、ここは少し道が広がったようになっているが、掘って調べてみたら、むかしの道幅だったようなんじゃ。」

文じい「3 年前に洪水があって、金山川が荒れて道がこわれたんじゃ。それで道をなおすのと、発掘といって掘って調べることもいっしょにやることができた。」

ミドリ「そう言えばお父さんが、街道の草刈りなどのお手伝いで、調査結果の説明も聞いてきたと言っていたわ。」

ふみお「石を積んで道が崩れないようにしていたのが見つかった、と言っていたね。」

文じい「特にわかるところがここなんじゃ。洪水で前の石積みが見えてきた。“野面積み”という積み方だ。残っていたところにさらに積んでなおしたのじゃ。」

あゆむ「道の山がわにも石が積んであるよ。」

文じい「おお、よく見つけたな。」

ミドリ「橋が新しくなっている。」

あゆむ「川もなおされている。」

文じい「洪水でけずられたところに、カゴマットというものをおいて、シートをかぶせた。ごくろうじゃったのう。」

ふみお「あ、一里塚だ。」

文じい「うむ、むかし、一里ごと、今では 4 キロメートルぐらいごとに、塚などをたてて距離がわかるようにしておった。ただ、何かが残っていないと場所を決めるのはむずかしい。」

ミドリ「石の碑がたっているわ。」

文じい「“馬頭塔”　と彫ってある。馬は荷物を運ぶのに大事だったからのう。」

ふみお「こんどは、七曲りだって。」

文じい「さあ、曲がりが実際いくつあるのか数えながら登るか。」

あゆむ「ふう、やっとちょうじょうについた。あれ、文じいだいじょうぶ？」

文じい「いやあ、つかれたわい。しかし、むかしはもっと大変じゃったろうのう。」

ミドリ「でも、頂上につくとほっとするわ。」

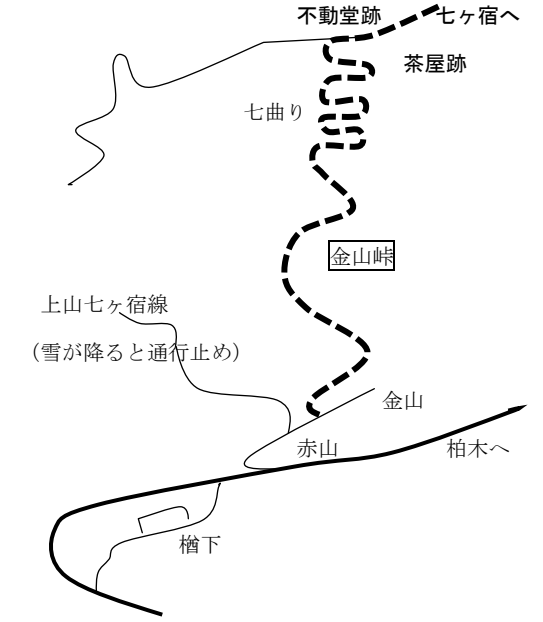
ふみお　「碑がある。何かがあったところだね。石段があって、上にも何かありそうだ。」

文じい「ここには、茶屋を兼ねたお堂があったようだ。発掘調査が行われたあとが見える。向かいには石段の下に手を洗う場所、上には不動堂があったという。鐘つき堂もあったが、あとで下に移ったともいう。今、新しい建物がたっておるが、元のものとは違うようじゃ。」

ふみお「いろんな人の調査研究をよく見ないといけないね。」

文じい「その通りじゃな。さあ、そろそろ下るとしようか。」

国指定史跡「羽州街道　楢下宿・金山越」



発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）